私は所謂装備品です

コーギー軍曹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は所謂装備品です

【Ｎコード】
Ｎ２０３４Ｙ

【作者名】
コーギー軍曹

【あらすじ】
１人の男が全世界の運命を背負い、絶望の宇宙へと旅立つ。これは、とある男の愛と勇気と血と涙、そしてＳＡＮ値あふれるＳＦ冒険ファンタジーである！
と、言う様な事は一切有りません。アホな作者のアホな作品です。
更新は不定期になる予定。

プロローグ1　月は出ているか？（前書き）

これは「我々は大勢であるがゆえに」の息抜き感覚でかいています。
更新は気分次第です。
ではドーゾ。

プロローグ1　月は出ているか？

「やあ諸君、よく来てくれた。
まずはお茶でもどうだい？　砂糖とミルクはいるかな？
え？　そんなもの入れない？
ハハハ、確かに緑茶に砂糖は無いね。
ん？　ああ、ミルクは中々イケるものだよ。今度試してみるといい。
まあもちろん、君たちの口に合う保証はないがね」

辺りを見回す。
十程の影が集まりこの話を聞いている。

「……所で、さっきから何処を見ているのかね？
私は此処、君の目の前のテーブルの上だ。
そう、その緑色の筋繊維が詰まっているかのような円形の物体だ。
中央に半球状の金属が見えるだろう？　それが私さ。

何処から声を出しているのかって？
そんな無粋なことを聞くもんじゃないさ。
そう言う物だと思ってくれればいい。

さて、何から話そうか。
私の故郷の話でもしようか。それとも両親、兄妹、友人の話か。
以前話した物語の続きでも話そうか。

たまには君たちの話も聞きたいものだがね。
何時も話をしているのは私ばかりだから、たまにはいいだろう？
なに？　いや？　そうか、それは残念だ。
何時か話してくれるまで待つとしよう。

では、今日は私の生まれの話をしよう。
ああ、そこに腰かけて聞いてくれ」

「ふぅ」と息を吐き、話を始める。

「私は地球と言う星の、日本と言う国で生まれ育った。
私の生まれは田舎でね、周りは森ばかり緑豊かな場所だった。
周りも優しい人ばかりだった。
ただお年寄りばかりでね、同年代が2人しかいなかった。
俗に言う幼馴染と言う奴でね、よく3人で遊んだものだ。
いつのころからか、あまりしゃべらなくなってしまったがね。
今頃、何処で何をしているのやら。
まあ、其れを確かめる術はもう無いのだがね。

小中と近くの学校に通った。近くと言っても片道2キロ半はあった。
そして高校。これはもっと遠かった。
駅から電車で1時間掛けて通った。毎朝5時起きさ。
そして大学。こいつはさらに遠くてね、一人暮らしをすることになった。
生物系の学科に進んだよ。
もともとは機械科に手を出そうと思っていたんだ。
だが、高校生の多感な時期にマンガやゲームに触れすぎたせいだろ

う、生物系に進んでしまったのは。
私はガン〇ムを造りたかったが同時に寄〇獣も造ってみたかった。
今思えば馬鹿な考えだったが……。

こうして大学に通い研究室に入り、研究に没頭した。
研究上法に触れることも幾つかやった。無論、盗みや殺しのような事はして無いぞ。
楽しかった。

そして私が２１の時、研究中に謎の爆発が起き、それに巻き込まれた。
扱っていたのは微生物だった。爆発なんぞ起こるはずがなかったのさ。
だが私は死んだ。
ここまでが私の、私が人間だったころの一生だ」

「まあ、お茶でも飲んで１息つきたまえ。

こんなところだろう。

では、今の話をしよう。
今の私は人ではない。
今の私は……強殖装甲（ユニット）だ。

いや、正確に言えば違うな。

中央に輝く制御装置（コントロールメタル）、これが私だ。

そう、私は強殖装甲となったのだ。
爆発に巻き込まれ死んだと思ったら、金属球の中。
まったく、人生とは何が起こるか分からんものだな……」

ズズズ……。
お茶を啜る音が狭い部屋の中かに響く。

すると1つの影が唐突にこう言った

「お主ノ生い立ちは分かった。
しかし……実験用（モルモット）ノ生物に対して話しかけるノはやめてくれんかノ〜。
見テいテ悲しくなると言うか、少し痛々しイと言うか……。
暇なノは分かるがもう少し何とかならんかノ？」

「誰のせいだと思っていやがるんですかこの蟲爺！」

これが、最近の何気ない日常の会話である。

プロローグ2　回想回

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲（ユニット）だ。

今日は何を話そうか。
私が如何に非モテ人生だったか、どれ程の非イケメンだったかの話をしようか。
それとも友人と呼べる者が片手の指ほどしかいなかったという事でも話そうか。
仲の良い友人2人（男女）に冷やかしで『お前ら実は付き合ってるんだろ？』と言ったら『何で分かったん？』って恥ずかしそうに言い返された時の、あの何とも言えない心の状態でも語ろうか……」

「自虐ネタに走るとは、寂しイ奴じゃノぉ」

蟲面の爺さんが突っ込む。
ネタとか一体どこでその言葉知ったんだよ。

「うるせーよ。いいだろ別に。私が自虐に走ったところで爺さんは痛くも痒くもないでしょうに」

「何故か見てイテ辛いンじゃ……」

「……」

「……暇じゃノ～」

「……暇だな。
暇だし回想でもするか」
何故このような体になったのか、其れを語らねばならんだろう。
「それじゃあ、回想スタート！」
？？？？？？？？？？？
「う〜ん、むにゃむにゃ。後５分……んん？」
私の目覚めた場所は、薄暗い場所だった。
確か菌の実験中に何かが爆発して、それから……。
「ここは何処だ？
ここは何処だ？
……。
……。
いやいやいや、ホントに此処何処だ。
何て言うか、無機物じゃない。壁が有機的な何かでできてる。
何かちょっと気持ち悪い」
その部屋はまるで生物の皮膚の様な見た目の壁で覆われていた。
「それにこれは、水か？　部屋全体が水に浸かっている。
いやこれは水じゃないのか？　だけど一体何だこの液体は。
て言うかさっきから全く体が動かない！？
これは……ゴ〇ゴムの仕業か！？　ゆ゛る゛さ゛ん゛！」

テ〇ヲが乗り移ったようだが気にしてはいられない。
すると、ゴポゴポと音を立てて壁に穴が合いた。

その穴から出てきたのは、昆虫と人間を＋して２で割ったような生物だった。

「何か来た！　何？　虫、虫なのか？　虫の神様なのか？
何々、虫を殺しすぎたから復讐に来たのか？　ここは地獄の３丁目か？
美人の閻魔様にまだ出会ってないし、三途の川で居眠りしてる死神にもまだ合ってないぞ！
ひょっとして寝ていたのか？　ずっと寝ていたから覚えてないのか？
誰でもいいから助けてくれ――！」

「＃？％γ＊？¶▼§λν！
β◎×ｏＯ（（、：＜⊇～：＆⊇＜”Ｏ。
（（）＄（～：？
＊，ω＜：＊＜⊇＜ω：～＋っ≡λつ＝つ：：（ｏ！？」

「すいませんすいません！
踏みつぶしてごめんなさい切り刻んでごめんなさいスプレー掛けてごめんなさい溺れさせてごめんなさい殴り殺してごめんなさい薬品の実験に使ってごめんなさい！
もうしないから許して下さい虫神様（仮）―！」

「／＃／＄＆＝＃ｉ？
―，＃，＝∀＝ゞ／　３＊／＋∓Π☆　⊂Ψ⊃／η⊃／θ～」

するとその虫神様（仮）は私を持ち上げ（！？）何処かへ運んだ。

その後よく分からない何かの機材的なものに入れられた。
嗚呼、これで私もおしまいか（？）
すると中に青白い光が差し込み……あれ？……何だか……意識が……遠のいて……い……く……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「起キロ」

「う～ん、むにゃむにゃ。後5分……誰だ！」

「起キ、タカ……」

「キャ――、シャベッタ――――！」

「言葉ヲ話シ、テハ可笑シ、イノカ？」

「あ、いえ。そう言う訳じゃないです。唯のお約束と言う奴です」

「ソノ様子デ、ハ通ジテイル、ヨウダナ」

「そう言えば何で急に日本語を？　ちょっと片言だけど……」

「面白、イ、実ニ興味深イ。
ドウ、ヤラコノヨウナ事ガ起コッタ、原因ハ私ニアルラシイ」

「え？　何が？　何で？」

「オ前ノ記、憶ヲ見セテ貰ッタ」

「どうやって？」

「お前ノ、コントロールメタル。そノ情報（メモリー）を覗カセテ貰ッタ」

「制御装置（コントロールメタル）？　何それガイバー？」

「ガイバー？　規格外品（ガイバー）ガドうカシタノカ？
アア、ナるホドソう言う事カ」

「勝手に自己解決するのって気になるからやめてもらえません？」

「ああ、すマナカッタナ。」

「所で、あなたは誰なんです？　唯の虫と言う訳ではないのでしょう？」

「当然ダ、アノヨうナ原始的生物、ト一緒ニサレテは困る」

「はあ」

「我々はウラヌスでアル。ソレトモお前ニハコう言ッタ方ガイイカ？
『降臨者』トナ」

「な……なんですとー！」

？？？？？？？？？？？？

「以上、回想終了！」

「結構適当じゃノぉ。
もっと色々あっタはずじゃが」

「黙らっしゃい！
……そう言えばまだ聞いて無かったな。
あんた確か私がこんなことになったのは自分のせいだとか言っていたが、一体何をしていたんだ？」

「ンン？　それはノ～、実は次元連結システムのちょっとしタ応用実験をしテおったノじゃが、どうやらその際に起きタ、トラブルが原因らしいノ」

「へ～……へぇ！？
今何かとんでもない物をサラッと言わなかったか！」

「ンン～。トラブルか？」

「いやその前だよ、前！」

「次元連結システムのことか？」

「そうだよ、それだよ！
あんたまさか〔天〔ゼオライマー〕〕でも造ってんのか！
衝撃の事実。
木原マサキは、実は降臨者だったんだよ！」

ΣΩΩΩ「な、なんだってー！！」

「誰じゃこいつ等。
それに何を言っとるんじゃお主は。
そもそも次元連結システムとは「長くなりそうだからいいや」……
そうか」

こんな感じで本日は終了。

ΩΩΩ「お疲れ様でーす」

「誰だお前ら？」

プロローグ3　主人公の能力設定と小話（前書き）

ギャグの道をまっしぐら。
一度でいいから強殖装甲着てみたい……。
それではドーゾ。

プロローグ3　主人公の能力設定と小話

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲（ユニット）だ。

今日は何を話そうか。

何？　私の能力について話せと？
ふふふ、よかろう。
……。
……。
……。
面倒くさいから最近流行りのＦａｔｅ風にまとめてみた」

【ＣＬＡＳＳ】ユニット
【マスター】？？？
【真名】御茶ノ水　賢（けん）
【性別】元♂
【身長・体重】３０？・１～２ｋｇ
【属性】中立・善？

【筋力】？　【魔力】？
【耐久】？　【幸運】？
【敏捷】？　【宝具】？
※殖装する生物の能力によって変化するが、ユニット時では粗（ほぼ）０である。

【保有スキル】

殖装
捕食の事。
捕食した知性体と有機的に結合し、その生体機能を強化・増幅する。

過剰防衛システム
　殖装時のみ発動可能。
　殖装者の意識が失われてから一定時間経過しても回復しなかった場合、殖装者の生命を維持するため立ち塞がる者は敵味方の区別なく撃破する。

「ま、こんなところか。言い忘れていたが、私の生前の名前は御茶ノ水賢と言うのだ。
それでどうかね？　この能力を見て。

何？　全然大したことない？
仕方ないだろう。元々強殖装甲は装備品の様なものなのだ。
装着する者がいなければ真価は発揮できんよ。
む？　何だねその目は。まるで口ばかりで全然使えない奴でも見るかの様じゃないか。
私は剣と楯の付いた鎧の様なものだよ。鎧は独りでに動くことはない。

無論私は普通の鎧とは違うから、単体で動き回ることも不可能ではない。
ただその場合は誰かのＤＮＡが必要となる。
君、ＤＮＡくれないか？　腕や足でかまわんぞ？

嫌か？　そうか、それでは仕方ないな。
所で、最近の少子高齢化問題についてなのだが「すまンが、ちょっと聞きタイことがあるンじゃが？」……なんだよ。人がイイ気分で独り言を言っている時に」

「悲しイ奴じゃノ……」

「それで？　何か用があるんじゃないのか？」

「ああ、そうじゃそうじゃ。
こノ巨人殖装（ギガンティック）と言う奴に付イて何じゃが」

「ギガンティック？　それがどうかしたのか？
大体あんたは私の記憶を見たんだろ？
それ以上は何も知りませんよ」

「あれは記憶を少々覗イタ程度と言う意味じゃ。
全てノ記憶を見るなどと言う事は、余程ノ暇人でなければやらンわイ。
それよりギガンティックじゃ。
ガイバーⅠの意志に反応し、航行制御球（ナビゲーションメタル）が蓄積されタ我々のノウハウを基に宇宙船（フネ）ノ組織と強殖細胞を融合させ誕生させタ武装形態なのじゃろ？。
所謂戦闘型ガイバーと言う物じゃな。
航行制御球（ナビゲーションメタル）がその形状まで変化させたと言う事は、今まで起こっタ例がなイ。
人ノ意思とは素晴らしイ。流石は兵器として生み出されタだけノ事はある。
より強くなろうとする意志は計りしれン物があるノ～」

「それで何が言いたいんです？」
「お主も同じような事出来ンか？」
「はぁ？」
「お主が強イ意志を持タぬ、根性無しノヘタレであると言う事は分かっテおる。
じゃが、何事も挑戦だとは思わンか？」
「嫌ですよ、メンドクサイ！
爺さんがやればいいでしょう。
えらく感情豊かだし、航行制御球（ナビゲーションメタル）だって認めてくれますよ」
「何を言っテおる。
どンなことも試しテみねば始まらンじゃろう。
来タまえ！　早速実験じゃ！」
「ちょっ、やめ……離せ、離せ、ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ！
やめろショッカー！　俺をどうするつもりだ！
な、何だその妙な装置は。またあの光が！　や、やめろ――――！
！」
アッ――――！

プロローグ4　まとめた話

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲(ユニット)だ。

今日は何を話そうか。
……。
……。
何？　現状が今一よく分からない？
そうだな。確かに、説明不足ではあったな。

先ず、ここが何処かを説明しよう。
ここは宇宙を漂う宇宙船(フネ)の中だ。
……いきなり何をと思ったかい？
この宇宙船は降臨者の遺跡宇宙船と同じものだ。
いや、ある程度は同じと言うべきか。
彼(じじい)は、この宇宙船に乗るたった一人のウラヌスだ。
そしてこの宇宙船は彼の実験施設でもある。

彼はウラヌスの中でも変わり者と言われているらしい。
その理由は彼曰く、未だ未練がましく強殖装甲(ユニット)にしがみ付いているからしい。
彼らウラヌスにとって強殖装甲(ユニット)は既に完成したものであり、これ以上手を加える必要の無い物であったらしい。
しかし、爺さんは強殖装甲(ユニット)の研究・開発を未だに続けていた。
理由を聞いてみたが、「結果に満足してイないからに決まっテおろう」と言われたよ。

私が憑依(入っている)しているこの強殖装甲(ユニット)もどうやら彼の開発したものらしい。
彼がどのような結果を求めて研究を続けているのかは分からない。
だが、その為に未だ様々な強殖装甲(ユニット)を作り出している」

「……壁に向かっテ話しかけるノ、イイ加減止めテもらえンか？
かなり不気味なンじゃよ、其れ。
何か悩みでもあるノか？
よければ相談にくらい乗るぞ？」

「ええい、煩いわ！
特に悩みなんか無―よ！　心配してくれて有難うございます！」

「そうかそうか」

「……」

「……」

「そう言えば、どう言う目的があってこの強殖装甲を造ったんだ？」

「ああ、それか？　それはノ、現段階で存在するありとあらゆる技術を、可能な限り盛り込んだ物なノじゃ。
所謂『ぼくのかんがえたさいきょうのユニット』と言う奴じゃノ」

「へ～。具体的に言うと？」

「一つ例を挙げるならば、殖装者単体による空間転移があるノ」

「空間転移？」

「お主らノ言うワープや瞬間移動と言ったもノじゃ。
空間転移システムはそノ大きさ故に宇宙船(フネ)等ノ大規模施設でしか使用デきなかったノじゃ。
其れをデきる限り小型化し、制御装置(コントロールメタル)に組み込んだノじゃ！」

「ほー、そいつは凄いじゃないか！
なるほど、私にもサイヤ人(悟空)の動きができるようになるのか。
瞬間移動かめはめ波ならぬ空間転移胸部粒子砲(メガスマッシャー)が撃てるわけか。
胸が熱くなるな」

「（お前さんに胸は無イぞ？）
しかし、幾つか問題があってノ……」

「何です？」

「エネルギーを余りにも消費しすぎるノじゃ。
恐らく一度転移すれば、距離に関わらずエネルギー不足でしばらくは戦闘などできンだろう。
胸部粒子砲(メガスマッシャー)なンぞ以てノ外じゃ。
其れと、転移には非常に正確なそして膨大な演算が必要となる。
下手に転移すれば地中や壁に埋まっタり、宇宙に飛び出しタり、そのまま何処か別ノ次元に放り出される可能性もあるノじゃ。
しかし、制御装置(コントロールメタル)では容量の問題でその膨大な演算が不可能でノ。
航行制御球(ナビゲーションメタル)並ノ容量があれば可能なンじゃが、前回ノ実験ではうンともすンとも言わなかっタからノ～」

「前回の実験？　ああ、あの巨人殖装(ギガンティック)を造ろうとしたあの実験か……。

……。
酷い目にあった割に何も得る物がなかった、あの実験ですかぁ？
私の中の大切なものが数多く失われてしまった、あの実験の事ですかぁ？
ケキャキャキャキャキャキャキャキャ」

「何か壊れテきタノ。不気味じゃからそノ笑い方止めテくれンか？
そノ事につイては謝るわイ。すまんかっタノ」

「まるで謝罪の気持ちが足りませんね。焼き土下座でもして下さいよ。
本当にすまないという気持ちで胸がいっぱいなら、どこであれ土下座ができる。たとえそれが肉焦がし骨焼く鉄板の上でも！」

ざわ…ざわ…。

ざわ…ざわ…。

「そう言えば、そろそろ実験ノ結果が出るころじゃ。ワシは忙しイから話はまた後でノ」

「適当な事言って逃げやがったあの野郎」

ΩΩΩ「ざわ…ざわ…」

「うるせーよ！　さっきから言ってたのお前らか！　てか誰だよお前ら！」

Ω「圧倒的……！　感謝！！」

「もういい、帰れ！」

これも、最近の何気ない日常の会話である。

プロローグ４　まとめた話（後書き）

まだまだ続くよプロローグ。

最近レギオンより強殖装甲の妄想が止まりません。
このままでは息抜きどころか、こっちが本編に……！

話は変わりますがヨーグルトソースって本当に紛らわしいですよね。
よくヨグソトースと読み間違えてしまいます。
〇〇のヨーグルトソース掛けとか、命でも懸けてるのかと思ってしまいますよ。
主に作る人の。

プロローグ5　御茶ノ水大地に立つ

「ジャガ　ショブン　ジョブビデブシダ（やあ諸君、よく来てくれた）。
私は強殖装甲（ユニット）だ。
今日は何を話そうか。
……。
……。
なあ爺さんよ、そろそろ私を歩けるようにしてくれてもいいのではないか？
具体的に言うと、もうあんたでいいから殖装させてくれ」

「うん、それ無理」

「バゼゼグ（何故です）？」

「強殖装甲ノ重ね着はできンノじゃ」

「なら、今殖装している其れを外せばいいじゃないですか」

「それも無理じゃ。今この宇宙船にはリムーバーを置いて無インじゃよ」

「リムーバーって、ユニット・リムーバー？」

「左様」

ユニット・リムーバーとは、強殖装甲を？初期化″する装置の事である。
このユニット・リムーバーから照射される特殊なパルスにより、制御装置（コントロールメタル）に記録された殖装者のデータを完全に消去することができる。
そうすることにより強殖装甲を起動以前の？ユニット″状態に戻すのである。
殖装者にとって命綱とも言える強殖装甲を解除することができる其れ（リムーバー）は、使用者によっては非常に危険なものとなりうる。
そのため、リムーバーは厳重に管理、保管されているのだ。
なのだが……。

「何で無いんだよ。どの宇宙船にも必ず一つは常備されてるって以前言ってただろうが」

「実はノ、実験ノ材料に使っテしもうたンじゃ」

「何でだよ！　そんな大事なもの使うか普通！　一体何の実験に使ったんだよ！」

「お主」

「はぁ？」

「じゃから、お主に使ったンじゃよ」

「ど、どう言うことなの……」

「言ったじゃろ、できうるすべてを詰め込んだと。

お主ノ制御装置（コントロールメタル）にはリムーバーも入っテおるノじゃ。
これによりリムーバーを用イずに、相手は言わずもがな己ノデータすら消去が可能になったノじゃ」

「それにどう言った利点が？」

「其れ位お主で考えンか」

「さっぱりだぜ」

「はぁ～、まったく。
今ノお主ならば殖装者を自由に選ぶ事が出来ると言うことじゃぞ」

「何で俺今呆れられたの？　まあいいや。
つまり殖装者が気に入らなければ強制的に解除が可能ってことか」

「まあ、そう言う事も出来るノ」

「ん？　相手にもできるって言ったよな。
じゃあ、爺さんのも解除できんだろ？」

「殖装状態でないと使えンぞ」

「マジで使えねーなおい！
あー畜生！　またしばらくは壁に向かって話続ける日々かよ」

「（其れは正直やめてほしイ。）
ウオッホン、そんなお主に朗報じゃ。
これを見たまえ！」

それは遠目に見れば人の形をしていた。
だが、本来頭があるべき場所には何もなく、首元には六角形の何かをはめ込めそうな窪みがある。
腕は長く膝付近まで伸びており、その手は、小指に当たる物は親指の様な形で付いていた。
足は人のそれと大差ないが、踵は無くもう一つ足がくっついているかの様に見える。
そして皮膚は、幾つもの触手が寄り集まってできたかのような模様を描いていた。

「何ぞこれ」

「元々実験ノ補助器具として作ったンじゃが、失敗して長イ間眠ってイたもノじゃ。
それに少々手を加えてノ、ユニットでも操れる様に改造したンじゃよ」

「め、名状しがたすぎだろ、これ……」

「そうか、気に入ったか」

「だれもそんな事言ってないですよ！？
て言うかこいつ旧支配者だろ！　絶対旧支配者だろ！
何か皮膚がぬらぬらしてる。」

「そんな擬音初めて聞いたノ。
それでは早速、お主をはめ込んで……、どうじゃ？」

キィイイイイインと音を立てて制御装置（コントロールメタル）が輝く。
ねちゃっ、と音を立てて片腕が持ち上がる。

「こ、こいつ……動くぞ……」

「どうやら成功ノ様じゃな」

「いあ！　いあ！　いあ！」

「大丈夫か？」

「うわっ、この肘関節反対方向にも曲がる！　キモイ！　って膝もか！！」

「柔軟じゃからノ」

「背中に難なく手が届く、キモイ！
それにこの手、ＯＦ（オービタルフレーム）っぽい。もしくはガフラン。
夜中に出会ったら気絶する自信がある！」

「そンな自信はいらンわイ。
で、どうじゃ？　違和感は無イかノ？」

「むしろ違和感しかない」

「じゃ、大丈夫じゃの」

「バビゾ　ギデデ　ギスンデグ（何を言っているんです）。
ギギパベ　ワベバギデギョグガ（いいわけ無いでしょうが）」

「今日はよくグロンギ語使っとるが何故じゃ？」

「ギジャ　バンデバブ（いや、何となく）」

「まあイイわイ。
これからは助手として手伝っテもらうからノ。
それまでは其の体を堪能せい」

「りょーかい」

プロローグ５　御茶ノ水大地に立つ（後書き）

主人公に体ができました。
これで自由に動き回れるよ！　やったね御茶ノ水君！

最初は今のギュオーみたいに蜘蛛型とかにしようと思ってたんだけど、気が付いたらこうなっていた。
何を言っているのか（ｒｙ

プロローグ6　知り合いの友人に会いに行く時ってどんな顔して会えばいいか分

「ジャガ　ショブン、ジョブビデブシダ（やあ諸君、よく来てくれた）。
パダギパ　ユニット　ザ（私は強殖装甲（ユニット）だ）。
キョグパ　バビゾ　ザバゴグバ（今日は何を話そうか）。
ガギビン　グロンギビ　ザラデデビダボドゼロバダソ「喋っとらンで、しっかり手伝っテくれ。ほれ、次はこいつノ計測じゃ」グバ（最近グロンギ語にハマって来た事でも語ろうか）……」

また独り言キャンセルされてしまった。
この爺さん絶対狙ってやってるだろ、そうなんだろ？
これは私にとって大切な一種の始まりの挨拶みたいなものなんだよ！　と言ってやりたいが、私は空気の読める大人なので敢えて口には出しませよ。

「ババダダジョ（分かったよ）。
ドボソゼ　ジギガン、バンゼ　ヅバデデ　ジベベンギデ　スンザフラスコ（所で爺さん、何でフラスコ使って実験してるんだ）？
ゴンバロン　ヅバグジヅジョグ　バギザソグビ（そんなもん使う必要無いだろうに）」

そう、この爺さん事もあろうに地球で使うような実験用具で実験しているのだ。
こんなもの爺さんにしてみれば子供の玩具同然だろうに。

「ンン？
イやノ、お主ノ記憶を覗イタ時にこれを見つけテノ。
こう言っタ小道具を使うノは意外と中々楽しイもンじゃて」
「……ウラヌスン　ブゲビバパデデスバ、ジギガン（ウラヌスのくせに変わってるな、爺さん）」
「まぁ、よく言われるわイ。（それより訳が面倒くさイからリントノ言葉で話してくれンか？）
ああ、そうじゃ言い忘れテおった。
今日友人を訪ねるンじゃが、お主も来るかノ？」
「友人？　他のウラヌスか？」
「イイや、違う。ウラヌスには参加してイなイ別種族じゃ。
じゃが、ワシと個人的に仲の良い種族じゃから、心配はイらンぞ」
「ふ～ん。他の宇宙人か……。
そう言えば結構馴染んでいて忘れていたが、宇宙人と生活してるんだよな。
何気にスルーしてたけど、これが人類と異種族との第一接近遭遇（ファーストコンタクト）なわけか。
……なんだろう、心の中の何かが音を立てて崩れて行くよ」
　ちなみに私はあの「名状しがたきアーマー」を装着して作業しているため正確な意味で人類ではない。だから、もしかしてひょっとしたらノーカンかもしれない可能性がある。

「そもそも強殖装甲（ユニット）ノ時点で人類ではないンじゃが？」

「シャーラップ！

そう言や今日誰かに会うとか言ってた」けど具体的には何時よ？」

「地球時間で後１０時間ほどしたらじゃノ」

「割とすぐだな。宇宙に居るって実感が湧かない」

「紐付けて外に出れば実感くらイ湧くじゃろ？」

「それ何て処刑方法？」

「お主は強殖装甲（ユニット）じゃから死にはセンじゃろうて」

「死ななくてもきついわ！

まあ、それなら付いて行くよ。何か楽しそうだ」

「ふむふむ。なら、後１０時間じゃからそれまでは静かにしテおイテくれ」

「りょーかい」

～１時間後～

「この船って女性成分が足りないと思うんだけど？」

「もう我慢できなくなったか。

お主はたった１０時間も静かにしテおれンノか？　大体そんな成分は知らン」

「今の私は強殖生物。性欲何ぞ殆ど消えている「殆ど？」お黙り。しかし、この電子化された心の奥底で本能が叫ぶのだよ……。“花が欲しい！”と……。正確には虹画像が欲しいところだ」

「現実ノ雌に性欲を向けンとは……。人類はそう遠くなイ内に滅ぶノではなイか？」

「仕方がないさ。現実問題として……。……喋りかけただけで痴漢扱いとかふざけんな！　誰が好き好んでテメ―何かに話しかけるかよ！　財布落としていたから仕方なく、親切心で渡してやろうとしただけだと言うのにっ！　いっぺん鏡を見てみろ！　５０時間位「あなたはだあれ？」と呟きながら見続けろ！　多分そのうち精神崩壊するから、いやむしろしろ！　精神崩壊してしまえ！　カミーユと同じ道をたどるがいい！　そんなんだから多くの男が2次元へと逃亡するんだよ！　何が男女平等参画社会だ！　既に女尊男卑四角社会じゃないか！　ゼ〇ライマ―！　塵一つ残さず消滅させてしまえ――！！」

さあ爺さん、この私の心からの叫びに、一体何と言って返す！？

「（@｣　ρ｣　@）ｚｚｚｚ」スピー

寝とる――！！

「ひ、人が渾身の大演説をしている時に寝るな――！！」

「ン、ンン？　終わったかノ？」

「ええ終わりましたが？」（＾ー－＾＃）ピキピキ

「なら言イたイ事は言っタじゃろ。しばらく大人しくしテおれ」

「レノンに腕押しとはこの事か……？」

「其れを言うなら暖簾（のれん）じゃろ？」

何でことわざまで知ってんだよ。

何故かな、最近まるで自分が馬鹿キャラのように思えてきたよ。決して馬鹿ではない筈なのに……。

まあ、相手は宇宙をまたにかける天才種族。対して此方はその天才種族に作られた戦闘種族。

この世界では人類って某野菜人ポジだったんですね。ウラヌスから見れば人類皆脳筋か……。悲しいな。

～9時間後～

ここはとある惑星。
この星にすむと言う、爺さんの友人に会いに来たわけだが……。

「久しいノ、友よ」

「此方もだ、我が盟友よ。
お前さんが誰かを連れてくるのは初めてではないか？」

「これはワシノ助手じゃ」

「そうだったのか。珍しい事もあるものだ、ケラケラケラケラ」

今私の目の前で笑いながら爺さんと話している生物がいる。
2頭身で、人間に似た骨格を持ち、腹部と頭部に何かしらのマークがあり、歩くと「ピコピコ」という音がする蛙の様な生物。

突っ込まねーぞ。
絶対に突っ込まねーからな！
爺さんがチラチラとこっちを面白そうに見ているが、絶対に反応せんぞ。
いいか、絶対にだ！

「助手よ、ワシはまだ話す事があるノでな。

星に降りるノは初めテじゃろ？　じっくり見テ回っテくるとイイ」

強殖装甲って意外と表情出るんだぜ？
つまり何が言いたいかって言うとな……面白い玩具（実験動物）見つけた時みたいな顔してんじゃねぇよ！

所変わって太陽の下。
爺さんに言われた通り辺りをうろついてみた訳だが……。
何か地球にいる気分だ。

オーイハヤクシロヨー
オイソッチイッチャイケナイッテニーチャンガイッテタゾ
マッテヨケロロク～ン
ゼロロハトロイナー

元気にはしゃぐ餓鬼どもの声が聞こえるな。
……。
誰か私の代わりに突っ込んでくれ。

ん？　あの餓鬼ども何故あんな所を歩いているんだ？
おいおい、そんな細い足場に登ったら落ちるぞ。
あっ！　落ちた。言わんこっちゃない。

しかもこっちに落ちてきやがった。
空気的にキャッチするしか無いな。

オーライ、オーライ。

ボスッ
と音がして、見事両手の中にシュート。
超エキサイt……じゃなかった、全く危ないな。
あー、何か勢いでキャッチしたけど、無性にリリースしたい。超したい。
投げ返していいかな……。
怪我はしてないようだな。
ん？　こいつ……青くて十字の模様が腹と頭についてる……。
え！？

つづく

続くの！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2034y/

私は所謂装備品です

2011年11月20日02時11分発行